

## 成田市<sup>ひとつぼたいり</sup>一坪田入Ⅱ遺跡

事業名 圏央道（大栄～横芝）

所在地 成田市多良貝245-957ほか

調査期間 平成26年12月1日～15日、平成27年1月14日～3月2日

調査面積 2,101m<sup>2</sup>

主な時代 縄文時代、弥生時代、古墳時代

主な遺構 縄文時代早期・晩期遺物包含層

主な遺物 縄文土器、弥生土器、古墳時代土師器

### 主な成果

利根川水系の一つである大須賀川の支流に面した標高約30mの台地上に遺跡の中心があります。今回の調査地点は、その台地の斜面部から谷底に至る途中に形成された低位段丘面に位置しています。竪穴住居跡などの遺構は見つかっていませんが、厚く堆積した黒色土の中に縄文時代早期～縄文時代晩期の遺物が多量に見つかりました。出土した縄文時代の遺物の中では、縄文時代早期の土器が最も多く出土しましたが、注目されるのは、県内でも類例の少ない縄文時代晩期終末の千網式土器<sup>ちあみしき</sup>が出土していることです。千網式土器は、群馬県桐生市千網谷戸<sup>ちあみがいと</sup>遺跡から出土した土器をもとに名付けられた型式です。

この千網式土器は「浮線網縄文系土器<sup>ふせんあみじょうもん</sup>」と呼ばれる土器群の一種で、表面に細い隆起した線で網目のような文様を施すことを特徴とします。同様の文様を施した土器は、東北地方南部から関東、中部・北陸地域にまで広く分布しています。一般に細い粘土紐<sup>ねんどひも</sup>を土器に貼り付け、その両脇を指でなぞることにより隆起線を表現しますが、一坪田入Ⅱ遺跡の土器は竹などの丸い棒状の道具で平行する2本の線を描いて、線の間が盛り上がったように見える表現が特徴です。県内では成田市荒海貝塚<sup>あらみ</sup>、白井市向台Ⅱ遺跡<sup>むこうだい</sup>、四街道市池花南遺跡<sup>いけはなみなみ</sup>などで見つかっていますが、いずれもその出土量は少なく、竪穴住居跡なども見つかっていないことから、この土器を使っていた人々の生活は、詳しくわかっていません。



一坪田入Ⅱ遺跡から出土した  
縄文時代晩期終末の土器群